

【書評・紹介】

蘭 信三 編著『帝国以後の人の移動

—ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』

(東京, 勉誠出版, 2013年11月, A5判, xxv+981頁, 12000円+税)

手塚 薫

20世紀は移民の世紀であった。その前半に世界各地で人の移動が活発化する。この現象を、政治・経済の文脈から跡づけるのではなく、生身の人間の存在感としてどう立ち上がらせるのか。東アジアに軸足を置きながらも、移民を帝国・戦争だけに結びつけるのではなく、その精算が「残留」という形で冷戦期にまで持ち越されること、また、それはグローバルなテーマたり得ることを鮮やかに形象化したのが本書である。

19世紀末～20世紀の初頭に北米にわたった移民の子孫が、今日のアメリカ人口の9割を占めているという。人種のるつぼアメリカでは、世界各地からの大規模な移民の流入の結果、爆発的な人口増加があったとされる。時間的にやや遅れるが、近代満州にもそれに劣らない人口の集中があったことはあまり知られてい

ない。日本人や朝鮮人の流入(入植・植民)が注目されるが、人口移動の9割以上を占めていたのは、華北や山東半島からの漢人の移動であった。本書では、20世紀前半の東アジアで注目される人口移動のホットスポットとして、この満州以外にも、朝鮮、沖縄、および日本内地の3地域を掲げ、研究成果を集中的に掲載している。

帝国内部の人口移動に限定せず、アジアへの移民と北米・南米への移民は、どのように関連していたのか。「20世紀の東アジアの近代化・帝国化のなかで、いわゆる日本人、朝鮮人、中国人、ロシア人などの東北アジア諸民族の人の移動をより大きな、総合的な視点からあきらかにすることを最終的な課題とした」と編著者が述べるように、20世紀の普遍的なテーマとして帝国拡大期、帝国崩壊後、そしてそれ以降の冷戦期における人の移動に着目していることが本書の最大の特徴である。時代や地域も多岐にわたっており、とくに統一的な結論に向けて議論が展開されているわけではないという恨みがある。率直に言って本書の全体像を掌握するのは至難の業であるが、ここではとくに印象に残った論考を伝えることでその労苦に報いたい。

本書の構成を以下に示す。

## 目次

はじめに 蘭信三

序説 東アジアの帝国をめぐる人の移動 蘭信三・外村大・上田貴子

第I部 帝国崩壊と人の再移動—引揚げ、定住あるいは残留

第1章 在中国朝鮮人の帰還 田中隆一

表紙画像

第2章 帝国崩壊後の中国東北をめぐる朝鮮人の移動と定住 花井みわ

第3章 朝鮮半島における日本人送還政策と実態 李淵植 (翻訳: 李洪章)

コラム1 北朝鮮からの引揚体験 山本千恵子

コラム2 「南朝鮮」からの引揚げ 熊谷佳子 (編集: 大場樹精)

第4章 サハリン先住民民族ウイльтаおよびニヴフの戦後・冷戦期の去就 田村将人

第5章 満洲引揚げにおける戦時性暴力 猪股祐介

研究ノート1 引揚援護活動と女性引揚者の沈黙 坪田=中西美貴

コラム3 満洲からの引揚体験 坂岡庸子 (語り: 溝口節)

第6章 沖縄における台湾引揚者の特徴 野入直美

第7章 沖縄出身南洋移民と家族の生活世界 森亜紀子

第8章 アルキ、あるいは見知らぬ祖国への帰還 松浦雄介

研究ノート2 厄介な恋愛と不都合な再会 エヴェリナ・ブッハイム (翻訳: 今野裕子)

第II部 戦後体制と人の移動

第9章 在日朝鮮人の戦後と私 金静媛

第10章 アメリカ占領期における「密航」朝鮮人の取締と植民地主義の継続 福本拓

第11章 中華人民共和国の建国と「中国朝鮮族」の創出 李海燕

研究ノート3 北方民族オロチョン社会における植民地秩序の崩壊と再編 坂部晶子

第12章 戦後農地改革のトランスナショナル・ヒストリー 安岡健一

研究ノート4 戦後南米日系移民社会と戦後移住に関する研究史 大場樹精

第13章 高度経済成長期後半の日本における外国人労働者問題 外村大

第14章 戦後における台湾から「琉球」への技術導入事業について 八尾祥平

研究ノート5 戦後台湾をめぐるひとの移動の研究史 坪田=中西美貴

第15章 フィリピン引揚者の「ダバオ体験」 飯島真里子

第III部 ポスト植民地主義とグローバリズムの交錯点

第16章 サハリン残留日本人 中山大将

第17章 〈異国〉を〈祖国〉として 張嵐

研究ノート6 中国にルーツを持つ子どもたちへの中国語教育 高橋朋子

コラム4 不条理な世界を生き抜く 大久保明男

第18章 台湾における日本統治期の遺構の保存と再生 松田ヒロ子

第19章 日本語教育のトランスナショナル化 木下昭

第20章 インドネシア日系人の歴史と現在 林英一

第21章 日本人移民の子孫と国際婚外子 高畑幸

おわりに 外村大

21の章、6つの研究ノート、4つのコラムを擁する3部構成で、延べ36人の執筆者が、厚さが55ミリを優に超える大著を創り上げた。

そもそもこの研究の基礎となったのは、科学研究費補助金による特別研究「日本帝国崩壊後の人口移動と社会統合に関する国際社会学的研究」であり、その研究活動の成果は、すでに2つのシンポジウムに結実している。一つは2009年8月に札幌で開催された「日本帝国崩壊と人口移動—引揚げ、送還、そして残留」という、本書のI部とほぼ同じ内容

のシンポジウムである。今一つは2010年9月に博多で、「2010年、いま戦後引揚げを問う—帝国崩壊と戦後東アジア社会」であり、とくに本書の第Ⅱ部のテーマを扱っている。これらに本書の第Ⅲ部のテーマが新たに付け加わっている。

第Ⅰ部において、帝国崩壊後の一筋縄でいかない多様な引揚げの実態について、田村は、アイヌ以外のサハリン先住民族の動向をも詳述している。サハリン中北部のウイльтаやニヴフなどの先住民族は、1905年に北緯50度線に国境が引かれ、ロシア・ソ連領と日本領とに居住地が分断された。樺太庁はアイヌ以外の先住民族約400人のうち半数を敷香近郊の「オタスの杜」に集住させ、日本化政策を行った。ウイльтаやニヴフは、樺太アイヌとは異なり、一度も日本の戸籍に編入されることはなかったが、一部の男性は日本の陸軍特務機関によって非正規に徴用され、さらに戦後になるとソ連によってシベリアに連行された。彼らが突然行方不明になったために、ソ連側から日本のスパイと疑われた親族には動揺が広がり、再会を期して日本へわたる者や、朝鮮人男性と結婚するなどしてソ連施政下での生活を選択する者がいたという。

第Ⅲ部では、あまりにも有名な中国残留日本人だけでなく、ポストコロニアルな存在であるが語られることの少なかったサハリン、インドネシア、フィリピンの残留日系人・日本人がグローバリズムとどのように関連しているのかが討議され、本書の隠し味となっている。

一例を挙げれば、中山は、「サハリン残留日本人」のなかで、日本領時代からの住民で「残留」した人のうち、朝鮮人については、これまで残留者が43000人という数字が一般的だったのに対し、23000人前後という数字が有力になったことを述べている。1945年以降の、引揚げ、帰国などにも諸段階があり、冷戦時代ならではの複雑な事情が絡み合っていることなどをうまく整理している。

本書は論文と研究ノートが主体であるが、決して専門家向けに編集されたものではない。先に紹介した札幌シンポジウムでは、フロアから樺太引揚げ体験者の発言がきっかけとなって、ライフ・ヒストリーやドラマチックな体験談を拾い上げる必要性を痛感したというように、本書ではコラム記事を使って引揚げ体験者の聞き書きを効果的に織り込んでいる。これらは、数多くの個人的な物語の断片に過ぎないかもしれないが、それらの無数のパーツが組み合わされて歴史が構築されている事実の重みをかみしめる必要がある。そうでなければ、自分あるいは当該社会の信じたいことがどうしても一人歩きしてしまうことにつながりかねない。

昨今の日本におけるいわゆる反知性主義の台頭によって、日本と韓国・中国間の歴史認識のズレがますます大きくなっている。確かに、ヨーロッパ諸国の植民地支配の文脈のなかで生じた性奴隷や強制労働についてヨーロッパ諸国は一度も謝罪したこともなければ補償をしたこともなかった。だからといって、日本による過去の植民地支配が正当化されるわけではない。戦後半世紀以上も経て「慰安婦」や強制労働に駆り出された人々からの「償い」や「謝罪」の要求が噴出しているのは、何より日本自身が戦争責任を曖昧にしてきたからであろう。もちろん慰安婦や強制労働が戦争だけに結びついているわけではなく、それに先立ってアジア諸国を植民地支配した歴史を踏まえる必要があることを忘れてはならない。

それにしても、本書に通底する体験者の証言を聞く「オールラル・ヒストリー」によって、

「歴史的事実」と「社会的事実」の相違が期せずして浮き彫りになったことは印象深い。体験者の証言によって、満州開拓団に生じた戦時性暴力が、通説的に語られるソ連兵によるものではなかったことが明らかにされ、引揚げに伴い福岡県筑紫野市に設置された二日市療養所では性的暴力の記憶が消し去られた事実が淡々と記述される。隠蔽される事実の背後には何が潜んでいるのか。本書を読めば、そのようなことが現代にまでつながる課題として見えてくる。

(てづか・かおる／北海学園大学)